

179	朝顔の裂けてゆゆしや濃紫 石鼎	212	いづくにかたふれ臥とも萩の原 曾良
178	朝顔は末一りに成りにけり 舟泉	211	しら露もこぼさぬ萩のうねりかな 芭蕉
177	朝顔の荅かぞへん薄月夜 田上尼	210	葛の花水に引きずる嵐かな 一茶
176	去年の蔓に薺かかる垣根かな 素堂	209	雨晴や煙のこもる葛の花 嵐竹
175	白木槿夏華も末の一二輪 召波	208	大土手の葛のあらしのうねづたひ 青邨
174	手を掛けて折らで過行木槿かな 杉風	207	藤袴吾亦紅など名にめでて 虚子
173	立出でて芙蓉の洞む日に逢へり 白雄	206	見るうちや風の吹折る女郎花 樗良
172	稲妻やきのふは東けふは西 其角	205	雨の日やもたれ合たる女郎花 九湖
171	新涼の雨や芭蕉をひるがへし 巖	204	雨寒や石にもたれて桔梗咲く みさ子
170	そそよや藪の内より初嵐 日薫	203	花少し閉ぢて撫子暮るるかな 衣沙櫻
169	菜畠に残る厚さや瓜の苗 許六	202	寂しさの年々高し花芒 几菫
168	かなかなのひびきて水の廣さかな 紅洋	201	山は暮れて野は黄昏の芒かな 蕪村
167	鯛や山田を落る水の音 飄風	200	東に日の沈みぬる花野かな 虚子
166	庭に出て線香花火や雨あがり 立子	199	廣道へ出て日の高き花野かな 蕪村
165	小屋涼し花火の筒の割るる音 其角	198	一筋は花野に近し畠道 鳥粟
164	大文字を待ちつつ歩く加茂堤 虚子	197	道筋の細う暮れたる花野かな 風國
163	風そひて更に明るし大文字 常悦	196	稲塚に月のあがりしよなべかな 揖塘
162	送火のなかなか消えでなほ淋し 和香女	195	住む方の秋の夜遠き火影かな 蕪村
161	流燈や一つにはかに遡る 蛇笏	194	夕月や子等が遊びし草結び 漾人
160	精霊舟おもひおもひの汀より 一甫	193	三日月に必ず近き星一つ 素堂
159	精霊舟つづき流れてまはるあり 素十	192	竹縁の青き匂ひや初月夜 如竹
158	盆の月寝たかと門を叩きけり 野坡	191	秋出水乾かんとして花赤し 普羅
157	高燈籠松の木の間に見ゆるかな 五才長皿	190	戸明れば月赤き夜の野分かな 闌更
156	川べりに線香とぼるお盆かな 續人	189	浅川の水も吹散る野分かな 太祇
155	天の川星より上に見ゆるかな 白雄	188	船頭の棹とられたる野分かな 蕪村
154	真夜中やふりかほりたる天の川 芭蕉	187	大竹の藪吹きよせる野分かな 木導
153	夜明まで雨吹く中や二つ星 丈草	186	颱風の名残の驟雨あまたたび 虚子
152	涼しさや願の絲の吹たまる 乙二	185	飛んで居る二百十日の蜻蛉かな 孤舟
151	水の蜘蛛一葉に近く泳ぎ寄る 其角		九月
150	親よりも白き羊や今朝の秋 鬼城		露はれて露の流るる芭蕉かな 白雄
149	横雲のちぎれて飛ぶや今朝の秋 北枝	184	芭蕉野分して盪に雨を聞く夜かな 芭蕉
148	ひらひらと木の葉動きて秋ぞ立つ 鬼貫	183	此村の見ゆる限りは花たばこ 央磧
147	花ながら秋となりけり池の蓮 大魯	182	暁の紺朝顔や星一つ 虚子
146	秋もはや雁下り揃ふ寒さかな 野坡	181	此邊の道はよく知り赤のまま 虚子
	八月	180	

247	雁がねの重なり落つる山辺かな 樽良	280	此道や行く人なしに秋の暮 芭蕉
246	一行の雁や端山に月を印す 蕪村	279	秋風の吹けば蝶々むらがれる 素十
245	秋蝶や翅小さき草うつり 柊童	278	軒下の田水あかるし秋の風 梅室
244	松の木に吹あてられな秋の蝶 舟泉	277	秋風や舟より舟へ行く鳥 士朗
243	一杭にとまらんとして二蜻蛉 途子	276	蔓草や蔓の先なる秋の風 太祇
242	干草に影落しとふ蜻蛉かな 致格	275	夕焼の百姓赤し秋の風 許六
241	秋の季の赤蜻蛉に定りぬ 白雄	274	あかあかと日は難面も秋の風 芭蕉
240	白壁に蜻蛉過ぐる日影かな 召波	273	秋の山ところどころに煙立つ 暁臺
239	朝霧のふかき嵯峨野の野辺送り 三千女	272	少しづつみざる景色や秋の雲 鬼城
238	秋霧に河原撫子見ゆるかな 一茶	271	橋見えて暮かかるなり秋の雲 一茶
237	十六夜や慥に暮るる空の色 去来	270	刈株や水田の上の秋の雲 酒堂
236	やすやすと出ていさよふ月の雲 芭蕉	269	秋の空尾上の杉に離れたり 其角
235	浦風に蟹も來にけり芋畠 太祇	268	鶏頭にしみつく秋の入日かな 吾仲
234	雨の月どこともなしの薄明り 越人		十月
233	コスモスのそよりそよりと良夜かな 俳子		
232	芋の葉の打かさなりし良夜かな 猪子	267	秋水に孕みてすすむや源五郎蟲 鬼城
231	川ぞひの畠をありく月見かな 杉風	266	茫々と芒折れ伏す秋の水 暁臺
230	名月や葎の宿にかへりけり 成美	265	過ぎ行くや木屋匂ふ夜の門 竹の門
229	名月や只美しく澄みわたる 樽良	264	とり入るる夕の色や唐辛子 虚子
228	名月や船なき磯の岩傳ひ 太祇	263	月出でて明るく暗し蕎麦の花 零餘子
227	山畑に猪の子來たり今日の月 桃隣	262	月草の花に離れてうてなかな 虚子
226	ふるさとの月の港をよぎるのみ 虚子	261	コスモスや風に撓みてもれもなし 爽雨
225	松げげのはや月にてぞ有にける 士朗	260	紫の花の乱れや鳥かぶと 惟然
224	吹風の相手や空に月一つ 凡兆	259	紫苑吹く浅間嵐の強き日に 虚子
223	月清し遊行のもてる砂の上 芭蕉	258	大風の紫苑見て居る垣根かな 乙二
222	初潮や岬へつづく石燈籠 泊月	257	陰気なる秋海棠の小庭かな 虚子
221	初潮に追れてのぼる小魚かな 蕪村	256	水馬ばかりの池や竹の春 麥村
220	草むらや螳螂蝶を捕へたり 虚子	255	菱取の岸ばかり漕ぐ小舟かな 夕雨
219	蟲聞くや庭木にとどく影法師 素十	254	鯛雲晝のままなる月夜かな 花蓑
218	菜畠や二葉の中の蟲の聲 來山	253	はつきりと鯛の波の見えて來し 双曹子
217	白露に鏡のごとき御空かな 茅舎	252	網を干すあひだあひだに秋の海 一誠子
216	土くれにはえて露おく小草かな 鬼城	251	絶壁の下に径あり秋の海 聆子郎
215	朝露や浪やはらかに磯の草 太祇	250	朝涼し葉を立てて伸ぶ葉鶏頭 晨生
214	白秋のはやくも過ぎし盛かな 草亡川	249	鶏頭のいただきに降る小雨かな 禪寺洞
213	枝に葉に花の付たり雨の秋 關更	248	曼珠沙華に稲被さるや土手の秋 碧瑩

281	立出る秋の夕や風ほろし 凡兆	316	横に敗れ縦に破れし芭蕉かな 虚子
282	のびのびて衰ふ菊や秋の暮 許六	317	敗荷の池をめぐりて詣でけり 言人
283	秋の葉の池に立竝ぶや秋の雨 丈草	318	山見えぬ山ふところの栗林 左右
284	縁端の濡れて侘しや秋の雨 太抵	319	稻刈りて小草に秋の日の當る 蕪村
285	秋もはや岩に時雨れて初紅葉 許六	320	落穂拾ひ日當る方へ歩み行く 蕪村
286	肌さむし竹切山のうす紅葉 凡兆	321	黒雲にくわつと日のさす紅葉かな 木導
287	紅葉してそれも散行く櫻かな 蕪村	322	白河も黒谷もみなみぢかな 嵐山
288	心憎き茸山越ゆる旅路かな 蕪村	323	月に寝て夜半きく雨や紅葉宿 素十
289	再びのうすき夕日や菌山 吞界	324	裏山の日なき紅葉に下りけり 素十
290	茸山の蓆の客となりにけり 虚子	325	伏して見る水の早さや紅葉狩 虚子
291	刈草に蝗飛ぶ音ありにけり 巴峽	326	石山の石にも薦の裏表 乙洲
292	山風に笠取られたる案山子かな 鼠彈	327	藁垣に薦一連の紅葉かな 躑躅
293	落し水田毎の闇となりにけり 蕪村	328	薦の葉の二枚の紅葉客を待つ 虚子
294	かはせみの鶺鴒追うて秋の川 水竹居	329	真先に河原ささげの紅葉かな 十丈
295	行秋のところどころや下り築 蕪村	330	未枯の中に道ある照葉かな 蕪村
296	朝焼の空こそあかき渡り鳥 木導	331	未枯やほろりと落つる蝸牛 省成
297	押合うて熟柿を落す目白かな 凍郊	332	長き藻も秋行く筋や水の底 召波
298	緋連雀一斉に立つてもれもなし 青畝	333	行秋やあからさまなる水の面 温亭
299	冷たさにつやつや紅き木の實かな 禾人	334	松風や軒をめぐって秋暮ぬ 芭蕉
300	里古りて柿の木持たぬ家もなし 芭蕉		
301	柿ぬしや梢はちかき嵐山 去来		
302	草庵の四方の窓なる柿の秋 野風呂		
303	釣柿の影のながれし障子かな 熊六		
304	山葡萄熟れてこぼるるばかりなり 雁來紅		
305	蔓切れて揺るる通草を仰ぎけり 花櫻		
306	手のとどくところにありぬ鴉瓜 梓月		
307	道を塞いで秋の祭の獅子つかひ 淡紅		
308	秋は先づ目に立つ菊の荅かな 去来		
309	白菊や庭に餘りて畠まで 蕪村		
310	夕風や盛りの菊に吹き渡る 蕪村		
311	浮雲のをりかさなるや後の月 十丈		
312	十月の今宵は時雨れ後の月 蕪村		
313	大風にさわげる蘆を刈りはじむ 虚洞		
314	一張羅破れそめたる芭蕉かな 茅舎		
315	破れゆく芭蕉の風は衰へず 句星鬼		